



鹿児島県立
埋蔵文化財センター所蔵



発掘調査と活用の最前線

掘る、 活かす、 つなぐ。



市立図書館での巡回企画展（令和2年度）



歴史シンポジウム（令和元年度）



市内小中学校での出前授業（令和2年度）



春季体験学習会（令和元年度）

序 文

本書は、都城市教育委員会が地域の歴史を多くの市民の皆様にご覧いただくために、平成22年度から国の補助を受け実施している埋蔵文化財保存活用整備事業の報告書です。

本事業では、学校へのお出前授業や都城歴史資料館で企画展示を開催するなど、さまざまな取り組みを行っており、その一環として毎年歴史シンポジウムを開催しております。今年度は令和3年1月24日（日）に開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、開催中止を余儀なくされてしまいました。

そこで、シンポジウムで基調講演を依頼しておりました、鹿児島県立埋蔵文化財センター所長の前迫亮一様より賜りました玉稿を特別寄稿として掲載し、シンポジウムの中で紹介予定であった、本市の埋蔵文化財保護行政や埋蔵文化財保存活用整備事業のこれまでの取り組みや成果についてまとめ、1冊の報告書として刊行することとなりました。

本書を通して、地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まることを願いますとともに、先人の残した文化財を守り引き継いでいくことについて考えるきっかけとなれば幸いです。

2021年3月

都城市教育委員会

教育長 児玉 晴男

例 言

1. 本書は、都城市が令和2年度に国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を受けて作成した埋蔵文化財保存活用整備事業報告書である。
2. 補助事業の事業主体は都城市、実施主体は都城市教育委員会である。
3. 本書は、令和3年1月24日開催予定であった、歴史シンポジウム「掘る、活かす、つなぐ。～発掘調査と活用の最前線～」が、新型コロナウイルス感染拡大に伴って開催中止となったことを受けて、その内容についてまとめた報告書である。
4. 本書の刊行にあたり、鹿児島県立埋蔵文化財センター所長の前迫亮一氏より玉稿を賜った。
5. 本書の執筆は原栄子・近沢恒典・加覧淳一・柴畑光博が行い、編集は原が行った。

目 次

特別寄稿「先人の歩みに学び、未来へつなぐ ―考古学に何ができるか―

前迫 亮一（鹿児島県立埋蔵文化財センター所長）・・・ 1

第1章「掘る」・・・ 11

第2章「活かす」・・・ 23

第3章「つなぐ」・・・ 28

先人の歩みに学び、未来へつなぐ

—考古学に何が出来るか—

前迫 亮一

(鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長)

1960年鹿児島県鹿屋市生。'85年鹿児島大学法文学部人文学科(考古・文化人類学)卒業。
'91年鹿児島県教育委員会文化課。'92年同県立埋蔵文化財センター。日本考古学協会会員。



はじめに

令和2(2020)年4月、復元された鹿児島(鶴丸)城跡の御楼門が披露された。コロナ禍にあって、大々的な式典が執り行われなかったことは残念であったが、約150年ぶりに復活した鹿児島城下のシンボルは、高さ18メートルの偉容と共に新たな歴史をスタートさせた。

復元に当たっては、文献や古地図等の記録として残された情報に加え、考古学的手法である発掘調査も行われ、復元事業を支える多くの事実とヒントを与えてくれることとなった。

ここでは、御楼門復元を糸口として、「考古学に何が出来るか」「考古学の持つ可能性は」「考古学は必要か」等々について考えてみることにしたい。

1 鹿児島(鶴丸)城御楼門の復元

鹿児島城と言っても鹿児島県民の多くは「それはどこにあるの?」と聞き返すかもしれない。一般的には鶴丸城と呼んだ方がわかりやすいであろう。正式には鹿児島城ということであるが、現在、鹿児島県歴史・美術センター黎明館という資料館がある本丸跡の背後にある山、いわゆる城山の形が、あたかも鶴が翼を広げ舞っているように見え、鶴丸山と呼ばれていたことにちなんで鶴丸城と呼ばれているとされる。実際、石垣や堀が県の史跡に指定されているが、指定名称は「鶴丸城跡」となっている。

その鹿児島城・鶴丸城は、現在黎明館を取り囲むように石垣が「コ」の字型に、それに付随するお堀が「L」字型に残り、城郭の風情を残してはいるものの、一般的に城郭のシンボルとされる天守閣はなく、どちらかというと言質素な、人によっては「貧相」な城とのイメージを持たれる場合もある。天守閣のない城を説明する際によく語られるのが、「城をもって守りとなさず、人を以て城と成す」という言葉である。

そもそも鹿児島城の城域は、本来背後の城山(山城)と麓の居館等からなるもので、現在、鹿児島(鶴丸)城跡と意識されている黎明館や県立図書館あたりは、藩主の居所(居館)としての機能を持つ城の中核部分であった。そこは城山を背後に三方を堀で囲まれ、海側に面する御楼門は藩主格以上の者や藩の上級家臣など、限られたものしか通れない、鹿児島城の中の最上格の門であった。さらにその外側には、北に吉野橋堀、南に大手橋堀や俊寛堀、東側には名山堀や鹿児島湾があり、城山から鹿児島湾まで壮大な範囲の城域を持つのが鹿児島城であった。

山城と麓の居館(屋形)で構成される城館は、鎌倉時代からの有力大名として、武家の伝統や格式を重んじた結果とも言われ、御楼門がそのシンボリックな存在であったと考えられている。まるで目の前にある桜島と対峙するように、その威容を誇っていたと考えられる。

御楼門の復元に関しては、何度となく話が出ては消えという状況を繰り返していたが、平成25(2013)年に民間の「御楼門復元検討委員会」による「復元に向けた方向性の提言」が出され、その後発足した「鶴丸城御楼門復元実行委員会」が復元のための寄付金募集を開始したのを契機として、平成27(2015)年には「鶴丸城御楼門建設協議会」が設立され、様々な手続きや段階を踏まえ、平成30(2018)年に起工、令和2(2020)年3月に完成という運びとなったのである。この間、御楼門復元の流れとは別に、劣化の見られる石垣の修復に伴う発掘調査が行われていたこともあり、復元と修復に関わる発掘調査が同時に進められ、鹿児島城についての新たな知見が得られることとなった(表、図1、写真1)。

表 鹿児島城（跡）の歩み

No	年号	西暦	主な出来事
1	文治元年	1185年	忠久、島津庄下司職に任命される。
2	建久7年	1196年	島津家初代忠久、木牟礼城（出水市木牟礼）に入城したと伝えられる。
3	暦応4年	1341年	5代貞久、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（鹿児島市清水町多賀山公園）を下し入城する。
4	嘉慶元年	1387年	7代元久、大隅国守護職を襲封して、清水城（鹿児島市稲荷町清水中学校裏山）へ入城する（諸説あり）。
5	天文19年	1550年	15代貞久、伊集院城（日置市伊集院町）より鹿児島に入城し、内城（鹿児島市大竜町 大龍小学校敷地内）を築造して居城とする。
6	慶長5年	1600年	関ヶ原の戦い。
7	慶長6年	1601年	上山城普請。
8	慶長7年	1602年	初代藩主家久が鶴丸城の築城を始める（諸説あり）。
9	慶長11年	1606年	家久、内城から鶴丸城へ入城する。楼門前板橋渡り初め。
10	慶長14年	1609年	琉球平定。
11	慶長17年	1612年	御楼門柱立。
12	慶長18年	1613年	堀普請・葺の柱立。
13	元和元年	1615年	幕府の一国一城令により、上山城を廃止する。
14	寛永16年	1639年	城の屋敷建替え・石垣の修補を行う。
15	慶安3年	1650年	大雨により鶴丸城が破損する。
16	寛文4年	1664年	鹿児島城石垣崩壊。
17	延宝5年	1677年	鹿児島城東北門破損、東北に新規建立願許可。
18	天和3年	1683年	二之丸建直し。
19	元禄9年	1696年	鹿児島大火により、鹿児島城へ延焼し本丸（御楼門とも）が焼失、二之丸の一部等が焼失する。
20	宝永元年	1704年	鹿児島城、対面所、小番・大番所完成。
21	宝永4年	1707年	本丸再建工事完了。
22	享保12年	1727年	城下土居堀破損。
23	宝暦9年	1759年	普請方より出火し、奉行所や材木蔵が焼失する。
24	明和3年	1766年	城下土居大雨のため崩壊。
25	安永2年	1773年	造士館・演武館ができる。
26	天明5年	1785年	25代重豪、二之丸を整備拡大する。それまで二之丸御門と呼ばれていた門を矢来御門（現在の県立図書館正門の位置）に改める。御下屋敷門と呼ばれていた門を二之丸御門（現在の市立美術館正門の位置）と改称する。
27	寛政4年	1794年	二之丸の庭園を含む大工事が完了する。
28	文化7年	1810年	御楼門前の板橋を石橋に架け替える。
29	文久3年	1863年	薩英戦争。
30	明治2年	1869年	廃仏毀釈。
31	明治4年	1871年	廃藩置県。29代忠義は本丸を去り、鎮西鎮台第二分営が入る。
32	明治6年	1873年	本丸、御楼門が焼失する。
33	明治10年	1877年	西南戦争。二之丸が焼失する。
34	明治17年	1884年	（県立）中学造士館設立
35	明治34年	1901年	（官立）第七高等学校造士館設立
36	昭和20年	1945年	空襲により校舎全焼、石垣一部崩壊
37	昭和27年	1952年	鹿児島大学文理学部全焼
38	昭和32年	1957年	鹿児島大学医学部、鴨池町より移転
39	昭和35年	1960年	石垣一部崩壊
40	昭和49年	1974年	鹿児島大学医学部、宇宿町へ移転
41	昭和53年	1978年	発掘調査（本丸跡・二之丸跡、昭和54年まで）
42	昭和55年	1980年	県立図書館移設（現県立博物館より）
43	昭和58年	1983年	県歴史資料センター黎明館開館
44	平成11年	1999年	御角櫓跡周辺発掘調査
45	平成11年	1999年	御角櫓跡周辺石垣を一部積み替え
46	平成27年	2015年	鶴丸城保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施（継続中）
47	平成27年	2015年	本丸北側堀の石垣が一部崩落
48	令和2年	2020年	御楼門設立

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020『鹿児島（鶴丸）城跡—御楼門跡周辺—』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（205）より



図1 鹿児島城跡出土の鬼瓦



写真1 黎明館側から見た月と桜島と御楼門

2 発掘調査が語るもの

考古学の基本的な作業と言えば、なんと言っても発掘調査である。いわゆる現場作業である。ではこの発掘調査は、何のために行われ、どのような結果をもたらすのであろうか。発掘調査は何を語ってくれるのであろうか。

先人たちの足跡は、実際に形として残っているもの、文字や絵図・古写真等の記録として残っているもの、人々の記憶の中に残っているもの等がある。これらのうち、実際に形として残っているものを調査対象とするのが考古学の世界である。なかでも、地中（場合によっては水中）に残されているものを埋蔵文化財と呼び、考古学の主たる調査対象となっている。もちろん地上に現れている部分も、先人の思いが形として残されていることには変わり無く、調査対象となる。前述の鹿児島城跡の石垣や礎石跡等がそうである。また前方後円墳やエジプトのピラミッド、南米ペルーのマチュピチュ遺跡などもそうである。

とは言え、歴史を解明する際に考古学だけでは心細いのもまた事実である。前述した文字や絵図・古写真などの文献資料のほか、遺跡やその周辺の地理や地質・火山活動や気象・自然環境等、出土品については人骨・獣骨・貝殻・植物質の遺物等、さらには民具や伝承・祭祀や地名等、様々な分野の調査研究成果を総合的・俯瞰的に整理する必要がある。

たとえば、世界文化遺産となっている鹿児島市の集成館跡や鹿児島紡績所跡、鹿児島紡績所技師館などは、現存する地上物の配置と絵図、古写真等に加え、発掘調査の成果が決め手となった。反射炉関係の遺構に加え、地上では確認できない鹿児島紡績所の痕跡が地中に残っていたことや、鹿児島紡績所技師館の本来の位置が明らかになるなど、多くの発掘調査成果が世界文化遺産としての価値・評価の裏付けとなった。

現在は、鹿児島紡績所技師館付近から磯庭園としてなじみのある仙巖園まで、国の史跡、国の名勝として保護の網が掛かっている。その中を走る国道10号の下も、当時の地表面や遺構が残っていると史跡エリアに含まれている。

さて、発掘調査が多くの新事実を語ってくれた例は、調査の数ほどあると言っても過言ではない。過去のことなのに、もはや未知の世界で新鮮である。ここでは、鹿児島市武町にある寿国寺跡の調査成果の一部を紹介する。元々隣の西田村にあった真言宗の地蔵院と言う寺院を享保14(1729)年に移し、黄檗宗の寿国寺として再興したとされる寺院である。黄檗宗はインゲン豆で有名な隠元和尚が開祖とされる禅宗派のひとつである。

その寿国寺も幕末から明治初頭に吹き荒れた廃仏毀釈の流れの中で、明治初年に廃寺となった。鹿児島では、島津宗家の菩提寺である福昌寺も廃寺となったのをはじめ、廃仏毀釈運動を徹底して実行し、約1200あったとされる寺院の全てが廃されるという、極めてインパクトの強い出来事が起こった。今から約150年前のことである。ちょうど御楼門が火災で焼失した頃である。現在鹿児島にはいわゆる古刹がなく、仏教文化、建築文化的にもさみしい思いを抱く県民も多い。鹿児島城周辺には、福昌寺をはじめ大乘院・大龍寺・興国寺・浄光明寺・南泉院・南林寺等多くの大寺院が構えていたが、今は昔の状況である。歴史的・文化的・観光的にも極めて残念なことである。

平成11(1999)年から翌年にかけて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い寿国寺跡の発掘調査が実施された。九州新幹線は鹿児島中央駅を出発するとほどなくトンネルに入るが、寺の跡はそのトンネルに入るすぐ手前であった。調査では、江戸時代後半頃の寿国寺を描いた『三国名勝図会』の図に見られる、寺院入り口にあった石組遺構が検出された(写真2、図2)。徹底して破壊された鹿児島の寺院であるが、まだまだその痕跡は地中に残っているという事例となった。

現在まで残された過去の記録は、文字・写真・映像・記憶・伝承等がある。新しい記録資料がなかなか出てこない中、考古学的アプローチの代表選手である発掘調査による新資料の発見、提示は、歴史を解明する糸口を大きく膨らませてくれる行為であることをあらためて教えてくれる



写真2 寿国寺跡検出の遺構



図2 『三国名勝図会』掲載の寿国寺

のである。

ちなみに幕末から明治前半期の鹿児島は、薩英戦争や廃仏毀釈、さらには西南戦争と、とても荒々しい出来事が連続していたというイメージがぬぐえない。歴史に翻弄されながら、あえて次の展開へとページをめくらざるを得なかった当時の人々の心情を思うと、不安と焦燥、善悪のジレンマの中で、日々を過ごしていたに違いない。

一方では、そのような中でもたくましく、力強く生きてきた人々がいたからこそ、今日の私たちの暮らしがあるのも事実である。その後の歴史や今日の環境は、そのような状況を経て、もたらされていることを忘れてはならない。歴史の事実を知り、歴史に学ぶことは多い。

3 土地の履歴、地域の履歴

大隅半島南端にある旧佐多町（現南大隅町）の海岸沿いを車で走っていたときのこと。家々はあるけれども人影がない。夕方近くになっても灯りがつかない。集落がありそうだけど人の気配をあまり感じない。いわゆる「限界集落」である。この用語が登場して久しいが、今ではその先に行く「消滅集落」、あるいは「無住集落」という用語も存在するらしい。わが国の人口減少傾向は着実に進んでいる。しかも加速度的に。このような光景を目の当たりにすると、「こうして、やがて集落は遺跡になっていくのだなあ」と感じるときがある。空き家は解体されることもなく、朽ち倒れていく。まさに「生活の痕跡」＝「遺跡」の誕生、集落の遺跡化である。

しかし、思えば人類誕生以来、多くの人が生まれては死んでいった。それぞれが生きた痕跡が遺跡になったとすると膨大な数になるはずである。平成28(2016)年度に文化庁が実施した統計調査によると、現在我が国で知られている遺跡の総数は468,835か所、約47万か所と報告されている。一見多いようであるが、現在、日本の人口は約1億2千万人。日本の領土内において、これまで生きた全ての人々の痕跡が遺跡になったとすると、まだまだ膨大な数の遺跡が確認されずに眠っていると言うことになろう。ちなみに宮崎県は6,603か所、鹿児島県は8,337か所登録されている。

遺跡を掘ると、何層もの地層がバームクーヘンのように重なって見られる場合が多い。同じ土地であっても、地層によって様々な時代の人々の痕跡が確認される。同じ土地でも、全く見知らぬ人々が生きていた時代・時期があったということになる。そのような状況を、「土地の履歴」と表現する場合がある。土地にも履歴がある。人の歴史だけではなく、自然環境的な歴史もある。その土地で展開された、様々な歴史を調べ、時系列的にまとめると、「土地の履歴」が見えてくる。そしてそこには、個々人の歴史だけではなく、家族・親族・集落そして地域の歴史が反映されているということになる。

今日の日本が抱える課題として、「少子高齢化が進む社会にどう生きるか」というテーマがある。現状のままでは、加速度的に人口が減っていくとされる中、それぞれの土地・集落・地域において、かつて必死に生きていた人々がいたことを知り、記録に残すということは、今生きている人々にとっても、生まれてきた意味や生きていく意義について考え、前に進むために背中を押してくれる“きっかけ”につながるのではないだろうか。

よく地域の「活性化」を図ると言う台詞を耳にする。「活性化」とは何だろうか？この場合の意味を辞書的にまとめると、「組織や集落、地域などの活動を活発にすること」ということになるだろう。かつて同じ土地・集落・地域に生きてきた人々が、どのように生きてかを探ることは、ある種のエネルギーを創出してくれるに違いない。そこには共感・共鳴・納得といったポジティブなものもあれば、反発・拒否・否定といったネガティブなものもあるだろう。人だけでなく自然環境も含めた大きな歯車の中で動いてきた歴史を俯瞰することで、未来を選択する“糧”を得ることにつながると考えられるのである。

近年、考古学の世界で飛躍的な成果を上げているのが、災害考古学と呼ばれる分野である。都城市文化財課の柴畑課長は、その先頭に立っておられる研究者でもある。災害の中でも特に火山活動と人類の関係について、発掘調査の成果という考古学的手法で解き明かし、これから起こる

であろう火山活動の際、我々人類にどのような行動・意識が求められるのかについて多くの示唆を発信されている。今後おおいに参考にすべき有意義な情報をもたらしてくれる学問分野として、災害考古学の果たす役割が注目されている。

さて、「土地の履歴」、「地域の履歴」という点から、ご当地で思い起こされるのが「都城県」の存在である。明治4(1971)年11月、現在の宮崎県と鹿児島県にわたる「都城県」が誕生した。これは「廃藩置県」、その後の「府県統合」の結果であった。現在の2県は、「美々津県」・「都城県」・「鹿児島県」の3つの県に分かれていた時代があった。わずか2年で消滅する「都城県」であるが、その県域が考古学的に非常に興味深いエリアであることはほとんど語られたことはない。

おおむね大淀川以南の宮崎県南部と、大隅半島を中心とした鹿児島県東部がエリアとなり、県庁所在地はもちろん都城市であった。県域のほぼ中心に位置する県都であった。鹿児島県民の筆者にとって、鹿児島湾で大きく隔てられた現在の鹿児島県域よりも、都城県域の方がずっと身近でまとまりや求心力を持っている感がある(図3)。

考古学との関係と言っても唐突であるが、たとえば、縄文時代や弥生時代に流行した土器が使用された範囲を調べると、ほぼ「都城県」のエリアに一致するという事例が存在するのである。縄文時代早期の下剥峯式土器(約9千年前)、後期の丸尾式土器(約3千5百年前)(図4)、弥生時代中期の山ノ口式土器(約2千年前)などがそうである。また、古墳時代の南九州に見られる地下式横穴墓という特殊なお墓の流行範囲も同様である。

地理的なある種のまとまりは、いわゆる「地政学的」なまとまりとして、人々の暮らし(生業やしきたり、考え方等)を形成していたのかもしれない。そう意識すると「都城県」というエリアは、必然とまでは言わなくとも、意味のあるものとして捉えることが出来よう。

行政的な境界線がもたらす効果と弊害も見えてくる。境界線があることで、内外の意識が強くなり、「内」の親近感・一体感・身内感等に対し、「外」の疎外感・よそ者感が自然と生じてくる。

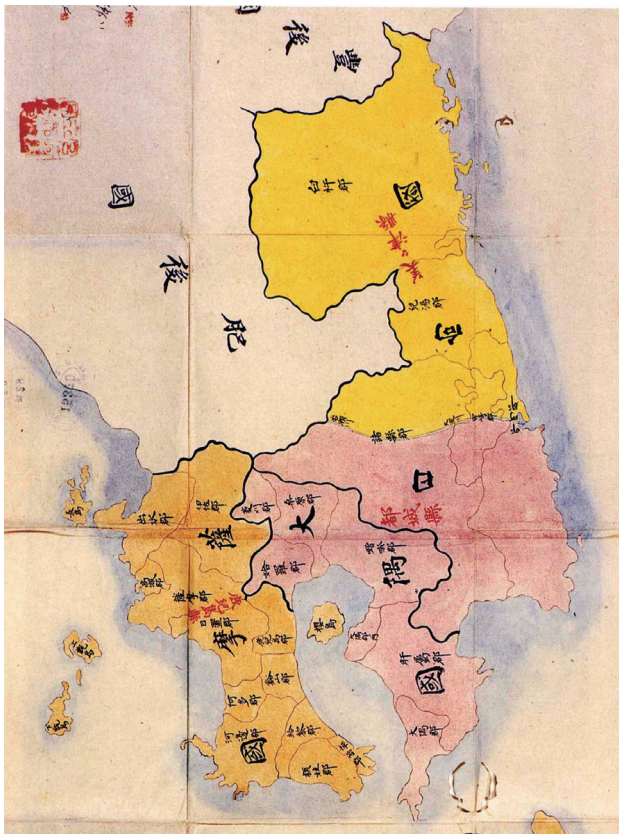


図3 都城県の位置と範囲



図4 丸尾式土器出土遺跡の分布

「グローバル社会」と言いながら、隣県との情報交換が少ないのもチグハグであり、滑稽ですらある。

県境を車で走ると、ナンバーの地域名表記が少しずつ変化していくのがわかる。当然のことながら、そのグラデーションが「境界を越える」という感覚をもたらしてくれる。

とは言え、実際に宮崎・鹿児島県境に住む人々は、お互いに交流し、「都城市」のベッドタウンとしての機能もある。地理的環境がもたらす人々の暮らしへの影響は、縄文時代も弥生時代も現代も、いつの時代も変わらない。普遍的現象と言えるのかもしれない。

4 伝えたい命、つながる命と確かな思い

22歳の秋、初めて発掘調査という考古学的イベントに参加した。奇しくも冒頭で紹介した鹿児島（鶴丸）城関連の調査で、現在の鹿児島市立美術館が新しく建設される際の試掘調査であった。そこは隣の鹿児島県立図書館と共に鹿児島城二の丸跡と言われている場所であった。2日間、旧美術館の正面玄関前（2m四方、深さ2m）をスコップや山鍬・鋤簾、移植ゴテやねじり鎌等を使って掘り続けたことを思い出す。近代から近世の陶磁器や瓦が次々に出土し、ワクワク、ドキドキ感が、いわゆる「掘削労働」をかき消してくれたことは言うまでも無い。

あれから40年近く経過し、数多くの遺跡の発掘調査に携わってきた。旧石器時代から近世・近現代まで。特に南九州の特徴でもある縄文時代の遺跡と出会う機会・場面が多かったが、個人的に最も印象に残っている出土品は、意外にも第二次世界大戦、アジア太平洋戦争とも呼ばれる、先の戦争に関連するものである。

平成9（1997）年、大隅半島南部にある旧根占町（現南大隅町）教育委員会による大規模な農地開発に伴う発掘調査が実施され、私も週2、3日程度ずつ、数か月間参加する機会を得た。調査開始当初から発掘作業員さんたちと話題になっていたのが、「戦時中、零戦が落ちた。その残骸を埋めた跡がどこかで見つかるかも知れない」という、ふだんの発掘調査では耳にしないような内容の話であった。

調査を進めた結果、昭和20（1945）年6月2日午前10時頃、大隅半島南部方面を荒らし回っていた米軍戦闘機140機を攻撃すべく、長崎県大村基地から飛び立った紫電改戦闘機21機のうちの1機の残骸が出土したのである。この紫電改21機は、佐多岬上空でほぼ同数の敵機編隊と遭遇。たちまち猛烈な空中戦となり2機を失うこととなった。2機はそれぞれ海と山に墜落したが、山に墜落した1機の機銃を含む機体残骸が発見されたのであった（写真3、4）。

さらに詳しく調べると、より具体的な内容が明らかとなった。そのきっかけとなったのが、当時子供であった、ある発掘作業員さんの「墜落後に鹿屋基地から軍の方々が遺体や機体を回収に来られた。その際に“ミカミ”という印鑑が出てきた」という貴重な記憶・証言であった。

衝撃で屈折しながらも形状を比較的残していた機銃や印鑑銘などをもとに、海上自衛隊鹿屋基地に調査を依頼した結果、海軍OBの渡邊昭三氏のご尽力くださり、秋田県出身の19歳の若者が搭乗していた紫電改であったことが判明したのである。それは様々な形で残された記録文書が明らかにしてくれた。考古資料・記憶・記録が連携して真実を解明した成果であった。とは言え、東北秋田から遠く離れた南国の山中（標高235m）で、19年という短い生涯を終えざるを得なかったひとりの若者がいたという事実を、発掘調査に参加していた皆と考えながら、目頭が熱くなったことを今でも鮮明に覚えている。私の心に今も強く、深く残っている出土品である。

このような昭和の資料は、まだ100年も経過していないことから、やはり生々しい感覚がある。ふだんの発掘調査では、数万年前とか数千年前などと、4桁や5桁の年数で説明する場合が多く、どちらかというと、「大昔の話」的な感じで、あまり身近ではない。しかし、最近あらためて思うのは、現在生きている人の命は、必ず人類誕生までたどれるはずだと言うことである。人としての肉体は滅びても、遺伝子レベルでは、ずうっと継続しているはずである。今生きていると言うことは、途中途絶えていないと言うことなのである。そう考えると、命の偉大さや尊さ、そして愛しさを



写真3 展示された紫電改（愛媛県愛南町）



写真4 大中原遺跡出土の機銃

感じざるを得ない。様々な戦いや災害、アクシデントや飢餓あるいは感染症等、全て乗り越えてきた命が、今生きている私たちの存在を支えているのである。これまで知られている歴史的な出来事・事件・事故・災害が起こった際にも、自分の遺伝子はどこかで確実に生きていたはずである。言い方を変えると、様々な波を乗り越えてきた、強靱でかつ幸運な遺伝子と言えるのかもしれない。そもそも「自分は運が悪い」・「何も良いことがない」・「生きている意味がない」などと悲しみ嘆くことはない。もともと「かなり強運の持ち主」なのだから。

おわりに

「考古学に何が出来るか？」と、大きな問いかけになってしまい、若干後悔しているところもあるが、考古学あるいは埋蔵文化財を生業のベースとしている者として、これは常に意識しておかなければならないテーマだと考えている。

平成 23 (2011) 年に起こった東日本大震災の復旧・復興に際し、道路の復旧・新設や集落の高台移転等で埋蔵文化財の発掘調査が必要となり、文化庁主導のもと、全国から調査支援を募り、鹿児島県からも 6 年間にわたり、延べ 7 人の職員が岩手県と宮城県気仙沼市に出向した（ちなみに熊本地震の復旧・復興に対して、熊本県と益城町に 4 年間で 3 名の職員を派遣している）。

一刻も早い復興が望まれる中、「遺跡の調査？」「このような状況で？」「それどころではない！」などと住民から不満・不平の声が出るのではないかと、職員を送り出した側の人間として強い懸念を感じていた。実際に現地では、遺跡調査のことを疑問視する新聞記事等が掲載されたこともあった。ところが、参加した職員に聞いてみると、ほとんどがそのような理由で不愉快な思いをしたことはないとの回答。むしろ、「ご覧の通り、集落は完全に無くなった。せめて地中に残っていてくれたものだけでも大切にしていきたい」「全て失ってしまったと思っていた。まだこんなに残っていたとはありがたい」「しっかり調査して欲しい」などと、肯定的な展開。さらには「遠い九州からわざわざ来ていただき、本当に感謝している。ガンバって！」と逆に被災者から励まされたと話した職員もいたほどである。

このようなエピソードは、まさに「考古学のもつ可能性」を教えてくれているのではないだろうか。

永い年月、つないできた命のもと、先人たちの歩みを知り、そこから多くを学ぶことは、自分自身の過去を振り返り、今を生き、さらに未来を切り開いていくための“熱源”を探ることであるに違いない。そう考えると、考古学を持つ可能性が見えてくる。命の旅路はこれからもまだまだ続くのである。

【引用・参考文献】（五十音順）

- 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2020『鹿児島の城館』黎明館企画特別展図録
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『寿国寺跡・梅落遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(40)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020『鹿児島(鶴丸)城跡―御楼門周辺―』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(205)
- 鶴丸城御楼門建設協議会・鹿児島県 2016『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』
- 根占町教育委員会 2000『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 文化庁文化財部記念物課 2017『埋蔵文化財関係統計資料―平成28年度―』
- 三木 靖 2014「島津藩の本城としての鹿児島城」『鹿児島国際大学 考古学ミュージアム調査研究報告』第11集 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
- 水ノ江和同 2020『入門 埋蔵文化財と考古学』同成社

【表・図・写真の出典】

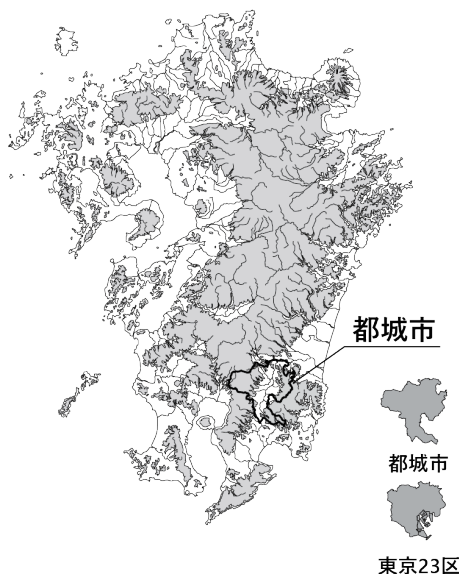
- 表、図1：鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020『鹿児島(鶴丸)城跡―御楼門跡周辺―』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(205)
- 図2：南日本出版文化協会 1966『三国名勝図会 上巻』(復刻版)
- 図3：『三県(鹿児島・都城・美々津)分界之図』(都城市立図書館所蔵)
- 図4：前迫亮一 1992「異系統土器文化の一接点」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 写真1：筆者撮影
- 写真2：鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『寿国寺跡・梅落遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(40)
- 写真3、4：根占町教育委員会 2000『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

第1章 「掘る」

1 都城市の地理的概要

都城市は、九州南部内陸部に形成された霧島火山群の東南のふもとに広がる都城盆地にあり、鹿児島県との県境にあたる宮崎県西部に位置している（第1図）。南北に細長い都城盆地の周縁には、霧島高千穂峰の標高1,573mを最高点として標高500～1,000mの山地が連なり、南は大隅半島に向けてわずかに開口する。近隣火山群の強い影響の下、シラス台地などの火山噴出物による地形形成が発達している。本市は東西36km、南北36km、面積は約653km²に及び、周縁山地を含む盆地の大半を占める。面積的には東京23区とほぼ同規模で、人口規模は約16万3千人である。

都城の地域史は、九州南部内陸の山間部にあつて薩摩半島・大隅半島・宮崎平野部との結節点にあたる地理的環境を背景として展開する。現在までに約350地点で開発に伴う発掘調査を実施しており、多くの調査成果が蓄積されている。



第1図 都城市の位置

2 都城市における発掘調査略史と埋蔵文化財保護について

本市における記録に残る発掘調査の中で最初の事例は、昭和11（1936）年10月に熊本県の在野の考古学研究者である小林久雄が実施した尾平野洞窟（現在県指定史跡）の調査であろう。この調査は、縄文時代洞穴遺跡の学術目的の調査である。1940年から1960年代にかけては、農業基盤整備事業等の工事中に古墳時代の地下式横穴墓等の発見があった際に、宮崎県の在野の研究者であった石川恒太郎らが県・市教育委員会からの依頼にもとづいて緊急調査を行っている。

市内での本格的かつ組織的な発掘調査は、昭和39（1964）年12月の年見川遺跡の弥生時代集落跡の発掘調査である。この調査は、宮崎県教育委員会が企画した第3次日向遺跡総合調査の一環であり、県が九州大学の鏡山猛教授をはじめ、石川恒太郎らに委託して、市内の高校生や自衛隊の協力を得て実施した。この調査の前後の新聞記事を見ると、当時、周辺で進行していた宅地造成等により遺跡が破壊される現状を危惧した地元の郷土史家らの働きかけによって、記録保存の発掘調査が実施されたことをうかがうことができる。その後、九州縦貫自動車道建設等の公共事業に伴う遺跡の発掘調査が本格化するが、昭和58（1983）年までは本市に（北諸島の5町にも）発掘調査を遂行できる職員の配置はなく、各種公共事業（祝吉遺跡）、民間開発（都城中之城跡）、地下式横穴墓等の緊急の発掘調査の際には、宮崎県教育委員会の職員が派遣されて調査を行っていた。

昭和59（1984）年、都城市教育委員会に考古学専攻の学芸員が初めて採用され、地下式横穴墓（築池地下式横穴墓・菓子野地下式横穴墓）の緊急発掘調査が実施された。昭和60（1985）年には、区画整理事業（郡元地区遺跡群）や市民広場整備事業（中尾山・馬渡遺跡）などの公共事業に伴う比較的大規模な発掘調査が開始されるようになる。それと並行して、昭和61（1986）年度から平成元（1989）年度にかけて、旧都城市内の遺跡詳細分布調査が実施されることとなり、縮尺2万5千分の1の地図上に遺跡の線引きが明示され、供用されることとなった。旧4町については、平成20（2008）年度に整備された山之口町を除いて、高崎町は平成2・3（1990・1991）年度、山田町は平成5・6（1993・1994）年度、高城町は平成7～9（1995～1997）年度にそれ

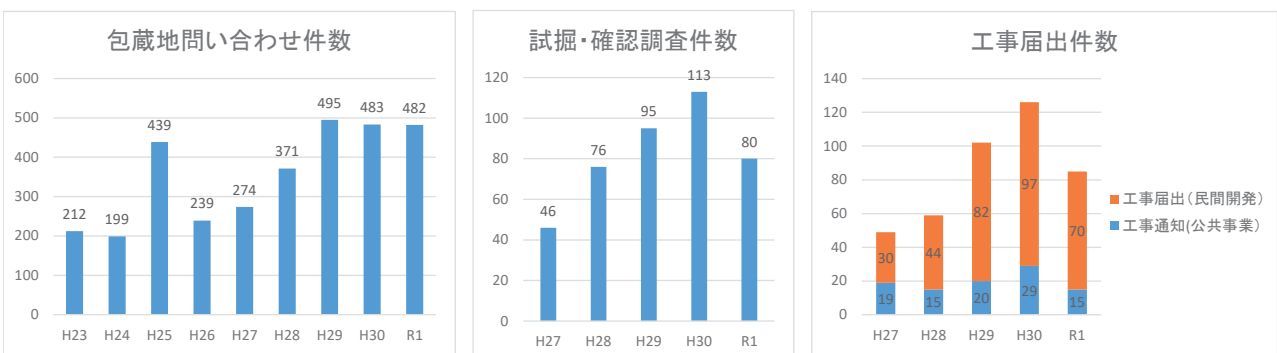
ぞれ遺跡詳細分布調査が実施され、遺跡地図が整備された。ほぼその時期に各町の埋蔵文化財担当者が採用されていった。

昭和 63 (1988) 年から平成 3 (1991) 年には、工業団地造成 (堂山遺跡) や大学用地造成 (立野向原遺跡) の発掘調査が実施され、平成元 (1989) 年には、初めて民間開発に伴う発掘調査 (野々美谷城跡) も行われた。平成 3 ~ 7 (1991 ~ 1995) 年度までは、県営ほ場整備事業 (丸谷地区遺跡群・細井地区遺跡群)、都城インターチェンジ近隣の工業団地整備 (並木添遺跡)、最終処分場建設 (十三束第 2 遺跡・上水流松ヶ迫遺跡)、市民広場整備 (正坂原遺跡) などの大規模公共事業に伴う発掘調査に加え、民間開発の大規模な発掘調査 (上ノ園第 2 遺跡・ニタ元遺跡・岩立遺跡) も相次いだ。平成 7 (1995) 年からは、中心市街地の区画整理事業 (柳川原遺跡・天神遺跡・中町遺跡) に伴う発掘調査も開始された。さらに、県営ほ場整備事業横市地区では、平成 8 (1996) 年度から平成 17 (2005) 年度の間 11 遺跡分、総面積 105,410 m² の継続的かつ大規模な発掘調査が実施され、本市の埋蔵文化財調査史の中で一つの画期的な出来事と位置づけられる。

他方、平成 11 (1999) 年に、国営のほ場整備事業に伴って宮崎県埋蔵文化財センターが実施した大島畠田遺跡の発掘調査では、平安時代前期 (約千百年前) の大規模な居宅跡が見つかり、専門家だけでなく一般市民からも大きな注目を集め、現状保存された上で平成 14 (2002) 年に国指定史跡となった。この史跡は平成 26 ~ 28 (2014 ~ 2016) 年度に歴史公園として整備され、本市内で記録保存のために発掘調査された遺跡が保存整備される初めての事例となった。その後、平成 23・24 (2011・2012) 年度と平成 29 (2017) 年から令和 2 (2020) 年に、都城インターチェンジ近隣地区において、大規模な工業団地造成に伴う発掘調査 (真米田遺跡・七日市前遺跡・柵田第 1 遺跡) が実施され、令和 2 (2020) 年度からは、県営畑地帯総合整備事業に伴う大規模な発掘調査 (相原第 1 遺跡等) が開始されている。

多くの遺跡を列挙して本市における発掘調査史を述べたが、市内に遺跡はどれほど残されているのだろうか。地中に残されている土器や石器、構造物の跡のことを「埋蔵文化財」といい、埋蔵文化財が確認されている場所のことを「周知の埋蔵文化財包蔵地」という。一般的には「遺跡」と呼ばれている。市内では現在までに約 1,500 箇所の遺跡が登録されている (第 3 図)。遺跡内で工事等を行う場合、文化財保護法に基づく工事の届出を県教育委員会へ提出する必要がある。また、工事前に遺跡の残存状況等を調べるための試掘・確認調査を実施している。令和元 (2019) 年度の開発等に伴う遺跡範囲の照会 (問い合わせ) 件数は約 480 件あり、80 件の試掘・確認調査を実施した。民間開発における工事届は 70 件、公共事業における工事通知は 15 件を宮崎県教育委員会へ提出した (第 2 図)。

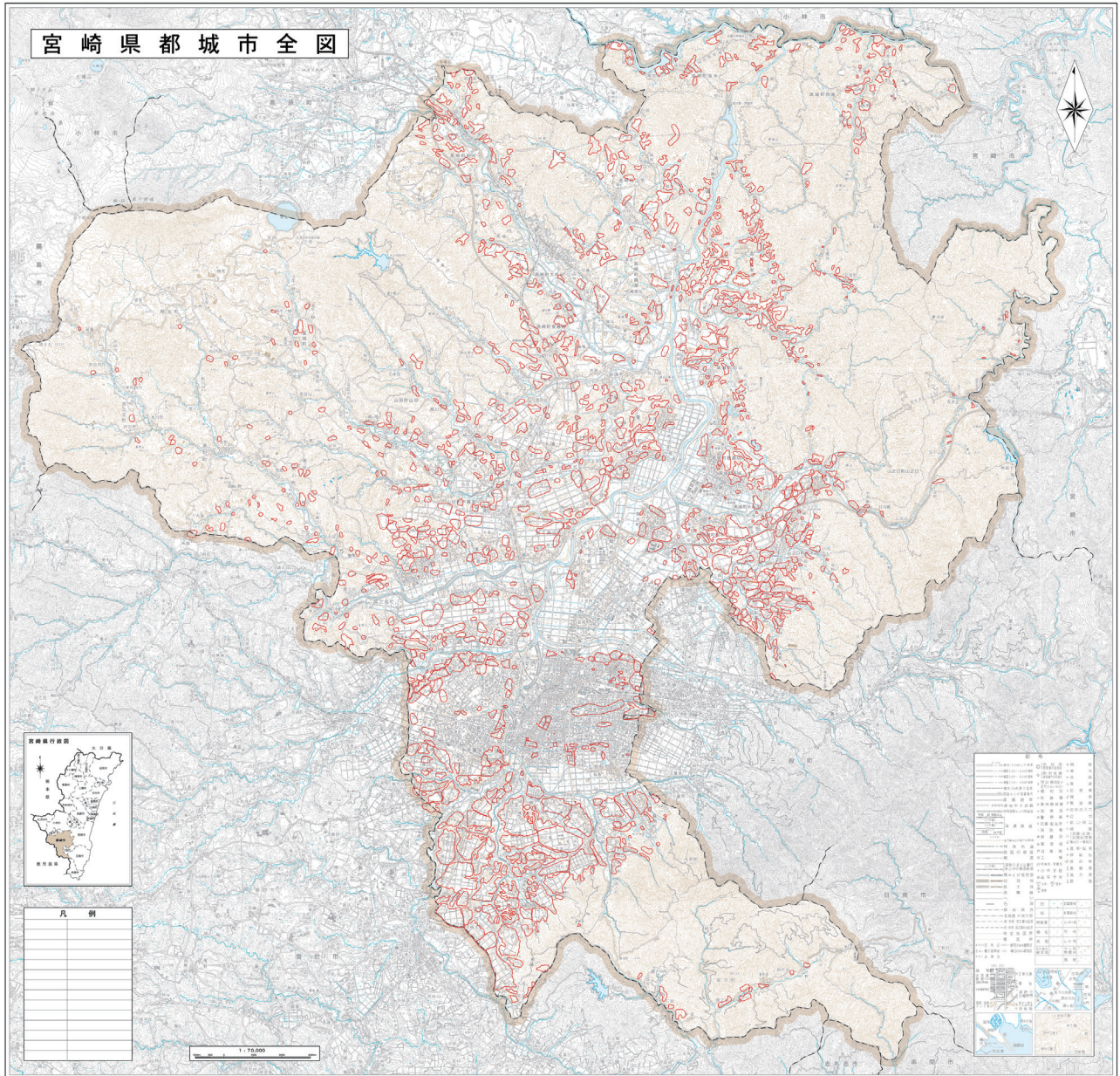
そして、工事等によって地下の遺跡が壊れてしまう場合、発掘調査を実施することになる。遺跡は本来、現状のまま保存 (現状保存) することが埋蔵文化財を未来へ残す一番の方法である。しかし現状保存が難しい場合、発掘調査等によって記録を取り、それを保存 (記録保存) する。



第 2 図 埋蔵文化財保護に関する各種件数

発掘調査も、その目的によって調査の方法が異なる。地域の歴史や文化を理解する上で重要な遺跡について、その内容や遺跡の範囲を把握するために行う「保存目的調査」と、開発の影響で遺跡を現状保存することができない遺跡において、その記録を取るために行う「記録保存調査」がある。本市における発掘調査の多くは「記録保存調査」であるが、「保存目的調査」も実施している。「記録保存調査」についても、民間開発（住宅建築や工場建設等）に伴うものと公共事業（道路工事や水道工事等）に伴うものがある。そこで次に、近年実施された調査事例について紹介する。

※文中、敬称は略した。



第3図 都城市遺跡分布図

赤枠で囲まれている部分が遺跡が確認されている場所＝周知の埋蔵文化財包蔵地である。この地図をもとに、発掘調査に至るまでの様々な手続きを行っている。地図データ（1/25,000）は市のホームページでも閲覧可能である。

南御屋鋪跡（姫城町）は、民間の集合住宅建設に伴って平成 27（2015）年度に調査を実施した（写真 1）。調査面積は約 295 m²である。遺跡は、大淀川の支流である姫城川左岸の氾濫原と扇状地（一万城扇状地）の境部分の微高地に立地している。南御屋鋪跡は、都城島津家 20 代当主の島津久茂が宝暦年間（1751～1764）に築いたとされる隠居屋敷である。見つかった遺構の中には、18 世紀後半以降に作られたものがあつたことから、屋敷の一部であると判断した。調査を行った区域は、近世後期に都城島津家が編さんした『庄内地理志』の絵図との対応関係から、屋敷地の北辺付近に相当すると考えられる（第 4・5 図）。

調査の結果、近世から近現代にかけての溝状遺構や掘立柱建物跡、階段状遺構などが発見された。写真 3 の溝状遺構（SD 2）は北西－南東方向に延びており、溝の底面のレベルを測ったところ北側に向かって下がっていることから、姫城川へと注ぎ込む排水溝としての機能が想定されている。また写真 2 の階段状遺構（SX 1）は、東から西へ階段を下りる構造となっている。確認された段数は 7 段で、柱穴跡も見つかったことから、上段部分には屋根等の構造物があつた可能性がある。第 4 図の絵図の北西には御門があり、「キザ（階段）」が描かれている。SX 1 がこの御門である可能性も排除できないが、絵図では門は姫城川に向かって開口しているのに対し、SX 1 は西側に向かって下りる構造となり、違いが認められる。また、庄内地理志には御門の階段が石段で作られていたとの記述があるものの、SX 1 においてそのような痕跡は認められなかった。

発見された陶磁器については、18 世紀後半以降のものが大半であり、薩摩焼のほか、肥前系陶磁器がまとまって見つかった。薩摩焼の中には、^{※1} 堅野窯系白薩摩の千鳥印をもつ碗や三島手等も少量ながら含まれている。これらは、この地域における陶磁器組成の中でも上位に位置づけられる貴重品である。鹿児島藩内において、このような貴重品の出土事例と遺跡の階層性については、一定の相関性も認められている。このことから、今回の調査区域が上級武士層の居住地であるといえよう。



写真 1 調査区全景（上が北）



写真 2 階段状遺構（SX 1）



写真 3 溝状遺構（SD 2）

※1）堅野窯系…鹿児島藩直営の藩窯。堅野冷水窯など。

※2）三島手…彫り込んだ文様に白土を埋め込んだもの（象嵌）

土角（どかく）遺跡

土角遺跡（山之口町富吉）は、市道改良工事に伴って平成29（2017）年度に調査を実施した（写真4）。調査面積は約310㎡である。遺跡は大淀川支流である花木川と東岳川に挟まれた扇状地（山之口扇状地）面端部に立地している。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡5基、土坑1基、平安時代以降と思われる土坑10基等が発見された。弥生時代については、後期（約千8百年前）の集落跡である。調査区域が立地する段丘面と南側の低位面との比高差は3m程で、容易に下りることができる。この低位面で水稲稲作を行っていたことも想像でき、実際に竪穴住居跡（SA3）からは石庖丁が発見されている。また、調査区の土層や遺構内に堆積した土を分析した結果からも、少量のイネが見つまっている。

竪穴住居跡の中からは大量の土器も見つまっている（写真5～7）。中でもSA3とSA4では、住居の中央に大型の壺を置き、その周りに他の土器を捨てている状況であった。捨てられていた甕にはススやコゲが付いており、日常で使用していた土器を捨てていたことがわかる。このような状況は、坂元B遺跡（南横市町）でも確認されており、この時期における住居廃絶の際の何らかの儀式の可能性が考えられる。



写真4 調査区全景



写真5 竪穴建物跡（SA4）3次元画像



写真6 土器を実測する職員



写真7 竪穴住居跡（SA4）

白山原（はくさんばる）遺跡

白山原遺跡（郡元町ほか）は、市道改良工事に伴って平成27（2015）・29（2017）年度に調査を実施した（写真8）。ちなみに27年度が第2次調査、29年度が第4次調査であり、第3次調査は市の公園整備事業に伴って平成27（2015）年度に実施したものである。調査面積は2次調査と4次調査合わせて約1,610㎡である。遺跡は大淀川の支流である沖水川と年見川に挟まれた開析扇状地（一万城扇状地）面に立地している。

調査付近一帯は湧水帯であり、湧水量が豊富な低湿地である。調査の結果から、調査区域付近は谷地形が入る痩せ尾根状の地形であったと考えられ、平安時代末から鎌倉・室町時代のどこかの段階で谷部分が埋め立てられ、水田耕作をしていたことが明らかとなった。

遺物については、特に平安時代末から鎌倉・室町時代の土師器（素焼きの器）や貿易陶磁器が大量に出土した（写真9）。その中でも特徴的なものとして、鋳型等の鍛冶関連遺物や木製品があげられる（写真10）。鋳型は同様のものが大宰府市の観世音寺の調査でも発見されており、鋳型から造られる製品の一例として化粧用具のひとつである眉刷毛の軸ではないかと考えられている。鍛冶関連遺物が見つかる遺跡の特徴としては、寺院との関連が指摘されている。調査区域と『庄内地理志』の絵図を重ね合わせてみると（第6図）、調査区域の南東側に「島津院安養寺跡」の記載があり、仏像をはじめ各種法具や建物の装飾品などの鍛冶生産が行われていたことが推察される。一方木製品については、木は有機物であるため空気に触れると腐りやすく、通常の発掘調査で発見されることは非常に少ない。今回の調査区域は湿地帯で、木製品は水に浸かり空気に触れることがなかったため、形をとどめた状態で発見された。木槌や編み物をするための錘が発見されており、市内で初めての出土例として貴重な発見となった。



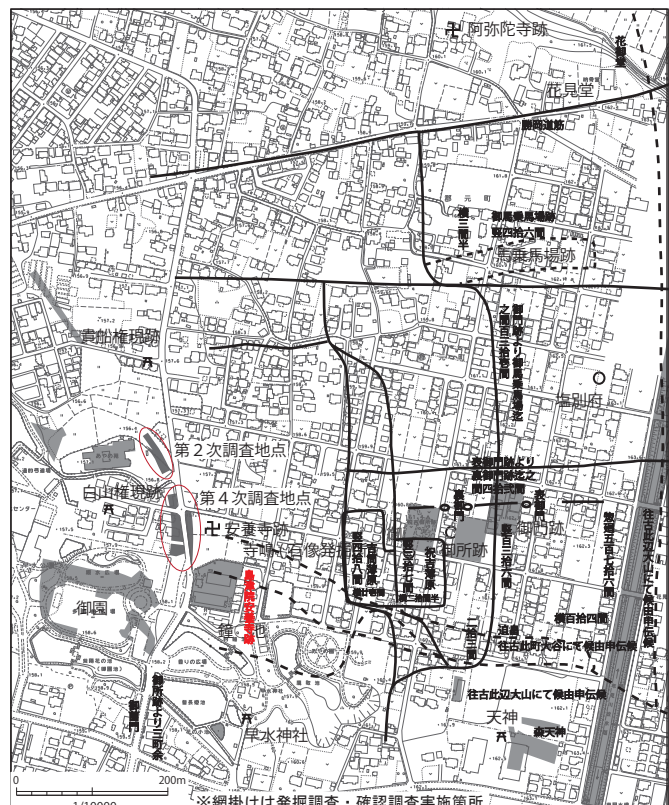
写真8 白山原遺跡全景



写真9 遺物出土状況



写真10 見つかった木製品や鋳型



第6図 都市計画図と祝吉御所跡の図

中町（なかまち）遺跡

中町遺跡（中町）は、中心市街地中核施設整備に伴って平成27（2015）年度に調査を実施した（写真11）。調査面積は約920㎡である。遺跡は大淀川とその支流である年見川により形成された開析扇状地（一万城扇状地）面に立地している。これまでも市街地の区画整理事業などによる発掘調査が行われており、今回は第5次調査である。元和元（1615）年に江戸幕府から出された一国一城令後、都城領主である都城島津氏は居城であった「都城」から現在の市役所周辺に新しく領主館及び町づくりを行い、移り住んだ。中町遺跡は、その町屋の一つである唐人町があったとされる地域である。

調査の結果、唐人町に関連する江戸時代の建物跡や井戸跡（写真12）が発見された。井戸の中からは、17世紀前半から中頃の薩摩焼の甕や肥前系の碗や皿、木製の箸や折敷など生活道具がセットで見つかり、「都城」から領主館への新地移りの時期に暮らしていた人々の生活や、唐人町の様子をうかがい知る大きな手がかりとなった。

『庄内地理志』に描かれている「唐人町・本町屋敷図」をみると（第7図左上）、今回の調査区域周辺には、高岡筋往還（現在の国道10号線）に沿って商家の家並みが描かれ、本通りから入った場所には武士とみられる人物の名が記載された屋敷とともに、水田も記されている。

また幕末から明治初期の絵図（第7図右上）からは、残念ながら居住者を特定することはできないが、近隣には「安楽善助」などの個人名がみられる。昭和8年に刊行された都城中心部の職業別明細図（第7図下半）には、調査区域周辺の商家として「毛利呉服店」「伊達陶器店」「持永旅館」「高野書店」「野口商店」などの名が認められる。調査で発見されたゴミ穴からは文書類の燃え残りなどもあり、明治後半期の領収書と考えられるものもみられた。このような遺物は、商家の敷地内特有の資料といえよう。また、近現代の遺構や遺物も多量に発見され（写真13）、商業地として発展していた市内中心地の当時の暮らしの様子を垣間見ることができた。

以上、民間開発に伴う発掘調査事例や公共事業に伴う調査事例を紹介したが、狭い面積の中でも、発掘調査が様々な地域の歴史の解明につながっていることがわかる。紹介した4遺跡の調査は、工事によって遺跡が壊れてしまう部分の「記録保存調査」であったが、次に「保存目的調査」の事例を紹介する。



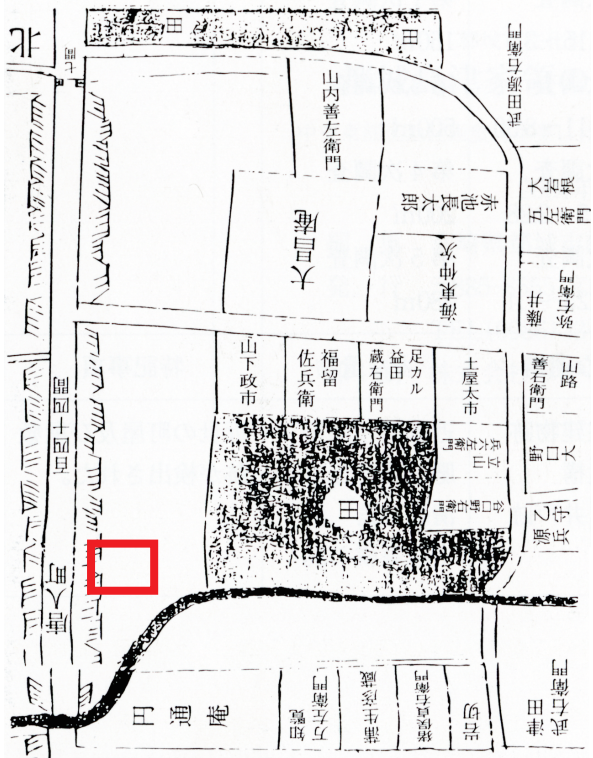
写真11 調査区全景（遺構完掘状況）



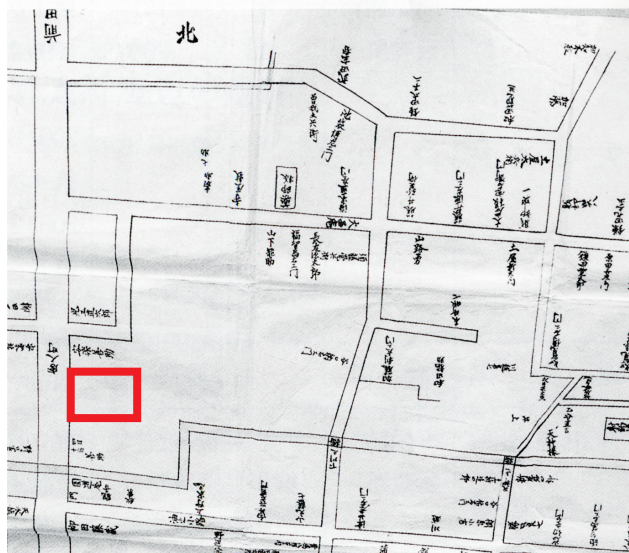
写真12 井戸（SC114）木製品出土状況



写真13 土坑（SC5）半裁土層断面



唐入町・本町屋敷図（「庄内地理志巻十四」より）



幕末～明治時代初期の絵図写
（都城市立図書館蔵）

※各絵図中で四角く囲った範囲は中町遺跡

第5次調査の調査区のおおまかな位置を示す



『大日本職業別明細図 第322号 宮崎県』にみる大正～昭和初期頃の都城中心部
（都城市立図書館蔵）

第7図 中町遺跡（第5次調査）に関連する古絵図

都城（みやこのじょう）跡

都城跡（南鷹尾町ほか）は、都城市の市名の由来となったとされる中世の山城である。都城歴史資料館建設に伴う本丸跡の発掘調査のほか、これまでに20回以上の発掘調査・確認調査が実施されているが、平成27（2015）～30（2018）年度にかけて、池之上城・中尾之城・取添などで遺跡範囲確認のための確認調査を実施した。調査面積は約383㎡である。遺跡は大淀川左岸に展開する成層シラス台地（蓑原台地）面の南東端部に立地している。「都城」は都城盆地における最重要の拠点城郭で、谷地形と人工的な空堀によって各曲輪を構築した「群郭式城郭」であり、大淀川を背後にした本丸から西へと城域を展開させる（写真14）。

確認調査の結果、古絵図と符合する虎口（城の出入口）や通路・土塁などの城郭遺構が良好に残存していることが確認され、曲輪や空堀の構造の一部が明らかとなった。中尾之城の調査では、絵図に描かれている虎口から曲輪へ直線的にのびる箱堀状の堀底道が確認された（写真16）。空堀は上面幅約20m、底面幅約5m、比高差約6mの規模である。中尾之城は城の大手口があった曲輪であり、大手口を守る大規模な堀であったことが分かった（写真15）。また、空堀は中尾之城、池之上城（写真17）ともにシラス面まで掘り込んでおり、崩落や洪水などによる埋没を繰り返しながらも再掘削をして、日常的に維持管理が行われていた様子もうかがえた。

各曲輪における出土遺物については、池之上城では中国、タイ・ベトナム産などの質の高い貿易陶磁器が見つかること、薩摩焼や肥前系陶磁器など比較的時期の新しいものは中尾之城・取添から見つかる量が多いことなど、主体となる時期・質・量に差がうかがえる。これらのことから、城域の拡大過程や曲輪の機能・居住者の性格などの推測も可能である。

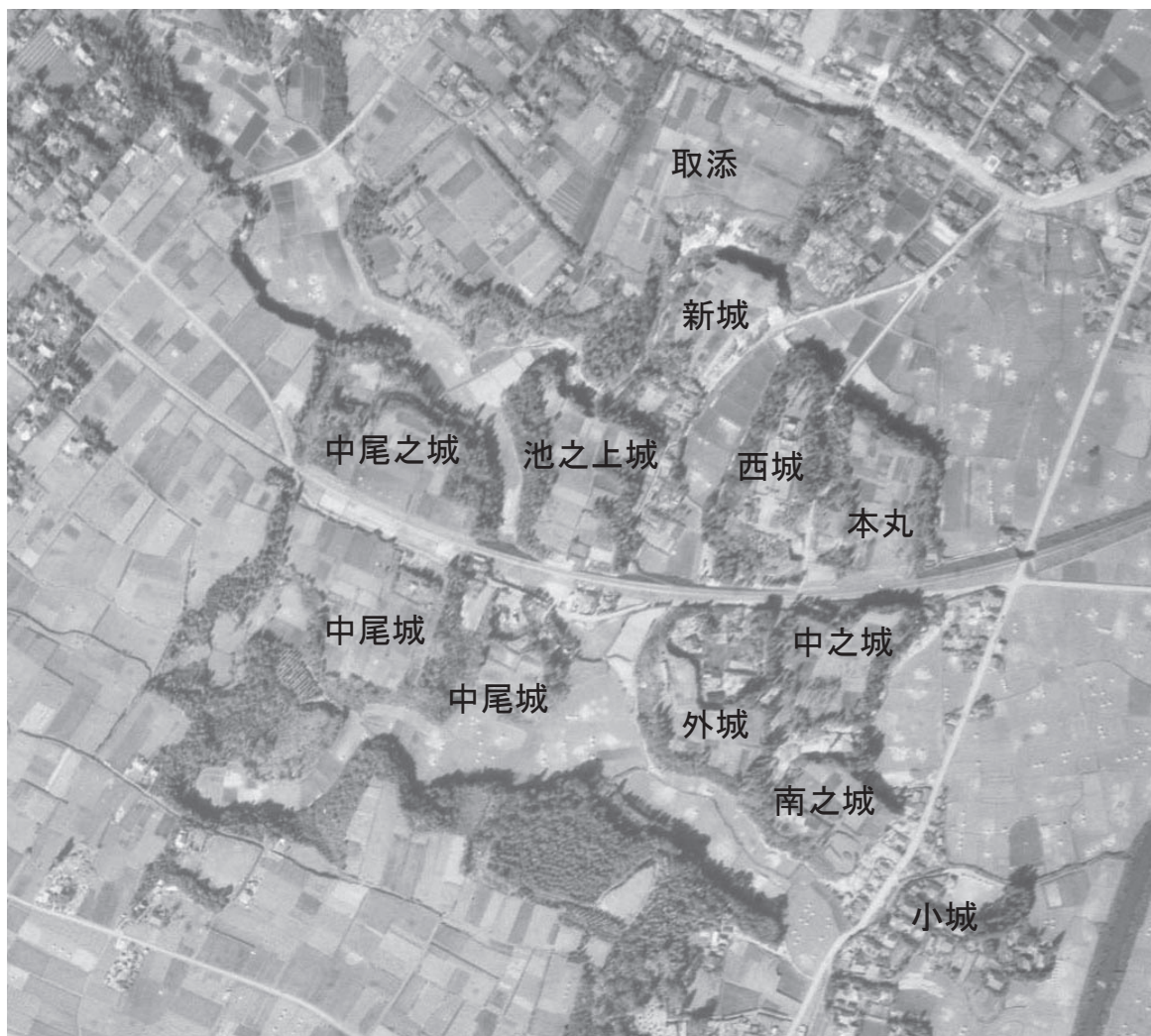


写真14 都城跡空中写真（昭和23年・米軍撮影・国土地理院）



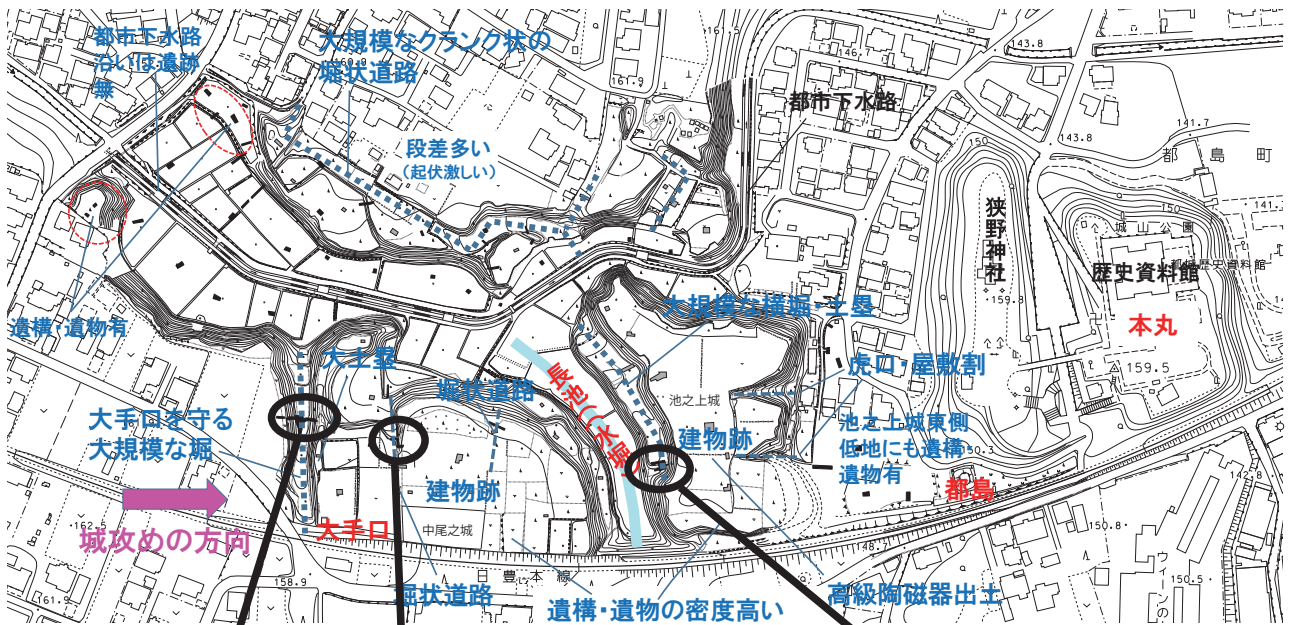
写真15 中尾之城空堀トレンチ (2017-12T)



写真16 中尾之城虎口トレンチ^{※3} (2017-11T)



写真17 池之上城空堀トレンチ (2017-11T)



中尾之城空堀トレンチ (2017-12T)

中尾之城虎口トレンチ (2017-11T)

池之上城空堀トレンチ (2017-11T)

第8図 近年の調査でわかってきた都城の構造

※3) トレンチ…掘削坑のこと。広い面積を掘削する発掘調査とは異なり、試掘・確認調査ではトレンチを設定し、最小限の掘削にとどめる。

郡元西原（こおりもとにしばる）遺跡

郡元西原遺跡（郡元町）は、市道改良工事に伴って平成28（2016）年度に発掘調査を行い、幅約4 m、深さ約2 mの大溝の隅角部（写真18）が発見された。郡元・早水町一帯は、万寿年間（1024～28）に成立したと伝えられる島津荘の成立拠点域と推定されている地域であり、調査で発見された大溝はその規模と年代から、島津荘の現地経営に係わる拠点施設の一部である可能性が考えられた。そのため、平成28（2016）年度から令和元（2019）年度にかけて、周辺域の確認調査を実施した。調査面積は約451 m²である。遺跡は大淀川の支流である沖水川と年見川に挟まれた開析扇状地（一万城扇状地）面に立地している。

確認調査の結果、大溝については2016年の発掘調査の隅角部を起点に、南―北と東―西のL字状にのびることがわかり（写真20）、区画の内部では、小型の溝状遺構や掘立柱建物跡などが確認された（写真19）。調査では、大溝の床面からの出土遺物が認められず、大溝構築の時期を確定することはできなかった。

以上6遺跡の調査事例を紹介したが、遺構や遺物といった形として残されているものの調査成果に加えて、文字や絵図・古写真等記録として残っているものと符合させていくことで、より具体的な歴史の解明につながっていく。



写真18 大溝の隅角部（平成28年度）



写真19 掘立柱建物跡（令和元年度）



写真20 発掘調査と確認調査の合成空中写真（上が北）

第2章 「活かす」

1 保存活用整備事業の概要

前章で述べた発掘調査では、建物跡など遺構の発見のほかに多くの土器や石器といった遺物が掘り出される。そもそも発掘調査とは、調査終了後に各遺構や遺物の整理作業を行い、1冊の調査報告書を作成・刊行するまでが一連の流れである。その報告書を刊行した後、遺物は市教育委員会の収蔵庫に保管される。ではその後、これら発掘調査成果はどのように活かされているのだろうか。

本章の「活かす」＝埋蔵文化財の活用とは、「発掘調査による出土品の展示や成果の発信などをつうじて、国民や地域住民が、その価値や調査成果をさまざまなかたちで享受できるようにすること（『発掘調査のてびき』より引用）」を指す。

本市では、「埋蔵文化財保存活用整備事業」として平成22（2010）年度より事業を開始し、現在に至るまで継続して実施している。本事業の実施目的は「出土品の活用を通して郷土の歴史に直接触れることで、先祖が守り抜いてきた自然・風土の素晴らしさ、資源の大切さ、『都城らしさ』について考え、郷土愛の高揚を目指す」ことである。これらを目的として、これまで体験学習会や市内小中学校への出前授業、企画展などのメニューを実施してきた。これらメニューは、利用者の減少による休止や新企画の追加などを経つつも、大幅な変更はなく現在まで継続している。そして事業開始から10年が経過する現在、「埋蔵文化財を広める」、「埋蔵文化財に親しむ」という大きく2つのコンセプトを掲げ、多くの人々に都城の埋蔵文化財を広め、親しんでもらうために、展示や講演会、出前授業、体験学習会等を実施している。

2 事業内容の詳細とその成果

次に埋蔵文化財保存活用整備事業の具体的な取り組み内容や成果について紹介する。

(1) 展示

展示は、「企画展示」と「巡回企画展示」の2種類を実施している。

企画展示は、都城歴史資料館において近年の調査成果をもとに都城の歴史を紹介している。歴史の学習が始まる小学6年生をターゲットとしながら、子どもから大人まで楽しんで見ることができ、地域の歴史に興味を持ってもらうことを目的としている（写真21）。

巡回企画展示は、市内の各公共施設の一角を借りて年3～4箇所で開催しており、各展示期間は2週間～1ヶ月程度である。広く地域の人々へ歴史に興味を持ってもらうため、各施設に来た際に気軽に歴史に触れることができることを目的として開催している（写真22）。巡回展の開催施設の一つに中心市街地の空き店舗をリニューアルした新市立図書館（Mallmallまるまる）がある。令和2（2020）年度の巡回展では出土品だけでなく、実際の縄文早期（約8千年前）の土を持ち込み、等身大の人形で測量や掘削の様子など、発掘調査現場の再現模型



写真21 歴史資料館企画展（令和2年度）



写真22 市立図書館での巡回企画展（令和2年度）



写真 23 発掘現場再現模型（令和 2 年度）

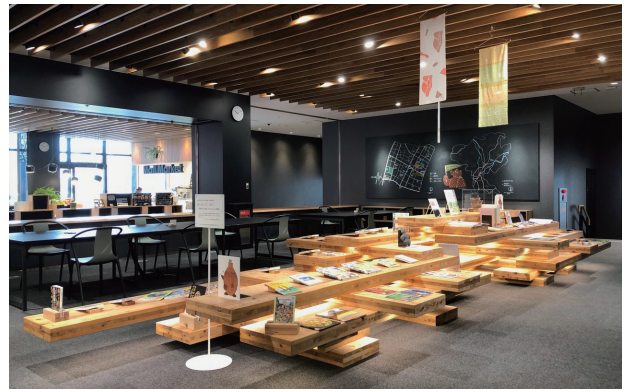


写真 24 図書館の関連図書展示（令和 2 年度）

を展示した（写真 23）。この再現模型は建物の外からでも目にすることができたため、多くの人々の目に触れたことだろう。また、図書館での開催では、巡回展中に図書館側が関連図書展示を同時開催しており（写真 24）、児童書から一般書まで幅広く文化財や遺跡、発掘調査の関連図書が展示されている。これも巡回展に興味を持つきっかけとなっている可能性は高い。

（2）講演会（歴史シンポジウム）

毎年、各時代や歴史的テーマに基づいて外部講師を招聘して開催している（写真 25）。歴史に興味がある市民に対して、より歴史への知識や理解を深めることを目的として実施している。古墳時代をテーマとした令和元（2019）年度は、初の試みとして、都城の古墳時代を紹介する動画を作成し、講演会への導入として最初に上映したほか、地下式横穴墓のVR体験を実施した。

（3）出前授業・出前講座

市内の小中学校を対象に、職員が講師となり、教科書には掲載されていない地域の歴史についての紹介を行う（写真 26）。自分たちが住む地域の歴史への興味・関心を育てることを目的としており、校区内や校区周辺などの身近な場所に残る遺跡の紹介や、そこから出土した土器や石器等に直接触れる体験を中心に授業を構成している。また、子どもたちに親しみをもらうために、職員が縄文や弥生など、昔の人のコスプレをして授業を行う場合もある。こうした取組みは小中学校だけでなく一般向けにも実施しており（写真 27）、主に高齢者学級からの依頼が多い。

出前授業の導入校は当初わずか4校であったが、令和元（2019）年度は30校にまで増加し、全57回、のべ2,615名の参加があった。現在では市内の8割以上の小学校が導入している。



写真 25 歴史シンポジウム（令和元年度）



写真 26 出前授業の様子（令和 2 年度）



写真 27 出前講座の様子（令和元年度）

(4) 体験学習会

地域の歴史や昔の人々の暮らしに興味関心をもってもらうことを目的として、開催している。

① 春季体験学習会 (写真 28)

市名の由来とされる山城「都城」の周知を目的として、平成 27 (2015) 年度より毎年 4 月末～5 月初旬に開催している子ども向けの城跡探検である。紙のよろいを身に着け、武将になりきって城跡探検を行う。弓矢やつぶて投げ、武将とのチャンバラ対決などの体験だけでなく、城跡を歩きながら「都城」の特徴や山城の構造なども紹介する。

② 夏季体験学習会 (写真 29)

夏休み期間を利用して歴史資料館で開催するもので、開催中の企画展見学も含めて、昔の暮らし体験として火起こしや勾玉作り等を行っている。

③ 秋季体験学習会 (写真 30)

国指定史跡大島畠田遺跡歴史公園にて、遺跡を知ってもらうことを目的に令和元 (2019) 年度より開催している。

大島畠田遺跡 (金田町) は、第 1 章でも述べたが、国営のは場整備事業に伴って平成 11 (1999) 年度に県埋蔵文化財センターが調査を実施した (写真 31)。調査面積は約 10,000 m² である。遺跡は、大淀川とその支流である庄内川との合流地点に形成された沖積地の微高地に立地している。

調査の結果、県内最大級の掘立柱建物跡 (写真 32) を中心として、一般的な大きさの掘立柱建物跡、池に囲まれた建物跡 (写真 33)、門跡、周囲を区画する塀跡や溝状遺構などが発見され、平安時代前半を中心とする地方有力者の居宅跡であることがわかった。また、出土遺物についても、非常に質の高い貿易陶磁器・国産陶器が多量に見つかった (写真 34)。本遺跡は、この時期の地方における有力者の登場とその様相を知る上で全国的にも稀有な遺跡として、平成 14 (2002) 年 3 月に国指定史跡となり、平成 29 (2017) 年に歴史公園として供用開始された (写真 35)。

歴史公園での体験学習会は、公園内で史跡見学を行ったのち、平安時代の暮らしを体験する。体験メニューとしては、墨書土器作りや火打ち石と火打ち金を使った火起こし体験などを行っている。



写真 28 春季体験学習会 (令和元年度)



写真 29 夏季体験学習会 (平成 29 年度)



写真 30 秋季体験学習会 (令和 2 年度)



写真 31 調査区全景



写真 32 大型掘立柱建物跡

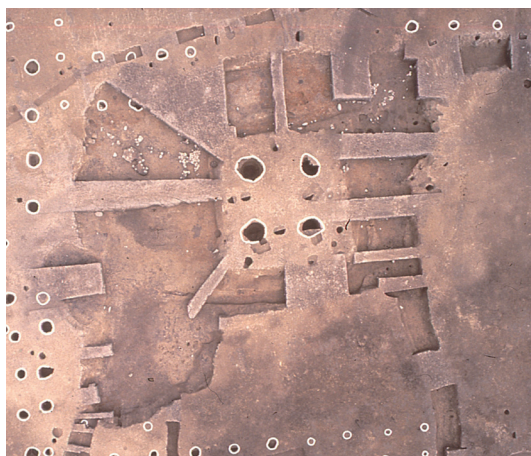


写真 33 池状遺構



写真 34 出土した貿易陶磁器



第9図 遺構配置図



写真 35 大島畠田遺跡歴史公園

④ 冬季体験学習会（写真 36）

市内の城跡を紹介する大人向けの城跡探検である。古絵図を片手に城跡を散策しながら、城の構造などについて解説する。平成 27（2015）年度より実施しているが、近年は都城跡の確認調査を行っていたことから、確認調査トレンチをそのまま見学するなど、最新の調査成果の紹介も交えたイベントとなっている。

これらの体験学習会は、参加者から高い評価を得ており、参加希望者も多い。春季体験学習会は毎年ゴールデンウィーク初日で開催しており、

初年度である平成 27（2015）年度は参加者 49 名であったが、現在では 100 名の募集に対して、申込開始 2～3 日ではほぼ定員に達する人気イベントとなっており、リピーターも多い。兄弟での参加も増加しており、未就学児が兄弟の様子を見て小学校に上がって参加することを楽しみにしている姿も見受けられる。また、体験は子どもを対象としているが、多くの保護者も同行するため、保護者世代への広報活動にもつながっているのではないだろうか。

大島畠田遺跡の体験学習会は開始して 2 年であるが、令和元（2019）年度よりも今年度の参加者は増加しており、関心の高さがうかがえる。体験学習は子どもを対象としているが、火起こしは同伴している保護者も夢中になって体験する様子が見て取れ、今年度はコロナ禍でイベントが少ない中、親子で体験ができる貴重な機会となったとみられる。

冬季体験学習会は毎年 2～3 月に実施しており、市内のみならず市外や隣県の鹿児島県からの参加者も見受けられる。歴史好きの参加者が多く見られるが、市内に居住していても本丸（現在歴史資料館が建っている場所）以外は知らないという市民も多く、毎年好評を得ている。また、実際に土塁や空堀などの城の構造が残存している状況を目にすることで、市民の文化財保護意識の醸成にもつながってきていると考えられる。

こうした事業を実施する中で子どもたちなど参加者の姿を見て、改めて「実物に触れる」、「実際に体験する」ことの大切さを感じるのである。



写真 36 冬季体験学習会（平成 30 年度）

第3章 「つなぐ」

前章まで、埋蔵文化財の発掘調査とその成果の活用について本市の事例を紹介した。最終章では、「つなぐ」をキーワードとして、埋蔵文化財をこれからの次世代につないでいくために、今後私たちがどのようなことに取り組んでいくべきか考えてみる。

埋蔵文化財の活用において出前授業や体験イベント等を実施する中で、多くの参加者の声を聞くことができる。その一部を次ページにまとめたが、こうした声を耳にすると、自分が生まれ育った場所を知ることにより一層地域に愛着を持ち、その歴史に誇りが持てる人間の形成につながっていることが垣間見える。歴史への素朴な興味関心から始まり、それが徐々に自分たちが暮らす地域の自分たちの歴史である、という意識に変化してきているのではないだろうか。

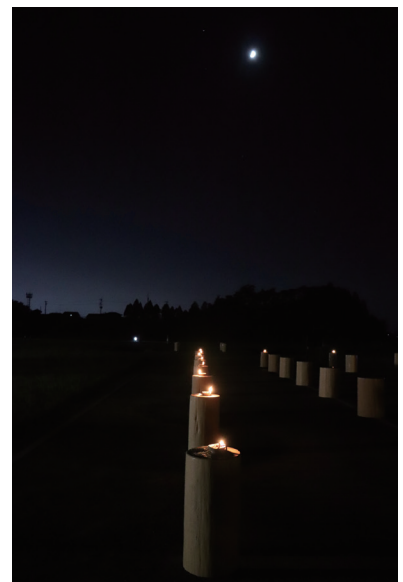
そもそも埋蔵文化財保護行政がこれまで浸透してきた背景には、自分たちの住む地域から出土する埋蔵文化財を自分たちの直接的、間接的な祖先のものだと思う心情が根底にあり、それらがお国自慢ともなる地域の宝物や誇りと捉え、ひいては愛郷心へとつながっているからだと考える。

前迫氏の特別寄稿の中で、東日本大震災の復旧・復興に関する埋蔵文化財の発掘調査の話題が紹介されていたが、まさに、遺跡が、残された地域のアイデンティティともいえる役割を果たしていた。昨今では、地域が未曾有の災害に晒されたときに加え、人口減少に伴って地域活力が減退傾向に陥ったときにおいても、埋蔵文化財という財産を次世代へ継承していくことが、地域を存続していく上で重要な位置を占めてきているように思われる。埋蔵文化財の調査から明らかとなった様々な事実が、私たちの暮らす地域のアイデンティティになってきているのである。

他方で、歴史を学ぶということは、現代とは人々の価値観やものの考え方が全く違う世界が、過去の世界にあったという文化の多様性の理解であることにも注意していきたい。そのことをしっかりと念頭に置いた上で、現在は過去と未来をつなぐ架け橋であり、過去の上に現在、未来があるというように、歴史のレガシー効果が現在を生きる私たちにポジティブな影響を与えていることも忘れてはならない。また、古人の残した「温故知新」という四字熟語には、過去にあったことをよく調べて、得られた知見を活かすという意味が込められていることを私たちは知っている。どの地域にもそれぞれの個別で特殊なながい歴史と文化が横たわっている。各々の歴史や伝統を排除すれば、未来どころか現在もあり得ないのである。そういったことを考えたときに、私たちの目の前に姿をあらわす埋蔵文化財について、しっかりと調査、検証、評価を加え、その成果を地域の人々に正しく理解してもらえないようにしなければならない。また一方で、残すべき重要なものについては、現地に保存し、将来の人間にその遺産をつないでいく必要がある。現地保存された史跡については、機能を喪失してしまった文化遺産を標本的に展示解説するだけではなく、付加的な価値を持つ公園としての面白みを追求していくことが必要となろう。かつての歴史の舞台に立つことで等身大の歴史を体感してもらい、そこで繰り広げられた人間ドラマを想像することの楽しさを提供するといった試みが、本市総合計画の中の基本方針の一つである「人間力あふれる人を育む」ことにつながると考える。

以上、埋蔵文化財の価値を未来へつなぐ意味について言及したが、そのためにも、我々文化財行政に携わる者は、埋蔵文化財を保護する意味や発掘調査の意義を日頃から多くの人々へ伝える努力をしなければならない。

月と灯明皿に照らし出された大型建物跡（大島島田遺跡歴史公園）➡



活用事業の取組みに参加された方々の声

巡回展示をみた方々の感想

●子どもたちの声

- ・都城の歴史を学んでいる途中だったので、とても役に立った。都城にもたくさんの遺跡があることに驚きました。
- ・遺跡がこんなにあるなんて知りませんでした！
- ・まいぶんの世界(令和2年度の巡回展示名)、おもしろかったです。学校の近くにも、遺跡があったことに驚きました。

●大人の声

- ・可能であれば、人数制限をしてイベントを開いてもらいたい。都合をみて、家族にも紹介したいと思いました。
- ・各遺跡についてもっと知りたいと思いました。
- ・自分の生まれ育った町に愛着を感じます。地域の発展を祈ります。
- ・こんなに身近に遺跡がたくさんあったなんて、びっくりでした！

出前授業を受けた子どもたちの感想

- ・学校の周りにも遺跡があることにびっくりした！
- ・都城にもたくさんの歴史があることが知れてよかった。
- ・実際に土器を持ったら、思ったよりも軽かった(または重かった)。
- ・教科書にのっていて、どれくらいの大きさなんだろうと思っていたものが、今日実際に見て触ることができてよくわかった。
- ・たくさんの都城の歴史を知ることができて、都城のことがもっと好きになった。
- ・今日教えてもらったことを帰ってからお父さんやお母さんにも教えてあげたい。

出前授業を行った学校の先生たちの声

- ・都城の歴史への興味や理解が深まる授業を、今後も実施してほしいです。
- ・歴史の授業に興味のなかった児童が、授業を受けてから、歴史学習のおもしろさに気付いたと感想をもっていました。
- ・授業を受けて児童の歴史への関心が高まったことが、日記や自宅学習の内容から伝わってきた。
- ・都城だけでなく、校区の歴史も説明していただき、大いに興味・理解が深まりました。
- ・他では絶対にできない「実物に触れる」という体験は、子どもたちにとって非常に貴重でした。
- ・自分たちが住んでいる地域からも土器や石器が発掘された事実を知り、とても興味を持っていた。

体験学習会参加者の感想

●子どもたちの声

- ・城の周りのことや昔の人の体験がいろいろできた。また参加したいと思った。
- ・もっとイベントに参加して都城のことを知りたい！
- ・体験やお城の勉強ができてよかったです。
- ・都城というお城はとても広いんだなと思ってびっくりした。

●大人の声

- ・歴史ある都城をもっと知りたいと思いました。
- ・都城の歴史をもっともっと勉強したい。
- ・城跡を壊さずに良い状態で残していかなければならないと思いました。

【引用・参考文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『国指定史跡 大島島田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第178集
文化庁文化財部記念物課 2010 『発掘調査のてびき』—整理・報告書編—
都城市教育委員会 2017 『南御屋鋪跡』都城市文化財調査報告書 第127集
都城市教育委員会 2017 『中町遺跡(第5次調査)』都城市文化財調査報告書 第129集
都城市教育委員会 2017 『白山原遺跡(第2次調査)』都城市文化財調査報告書 第130集
都城市教育委員会 2018 『郡元西原遺跡(第2次調査)』都城市文化財調査報告書 第134集
都城市教育委員会 2019 『土角遺跡』都城市文化財調査報告書 第136集
都城市教育委員会 2019 『白山原遺跡(第4次調査)』都城市文化財調査報告書 第137集
都城市教育委員会 2019 『都城跡一池之上城・中尾之城・取添確認調査報告書—』都城市文化財調査報告書 第139集
都城市教育委員会 2020 『都城市内遺跡13』都城市文化財調査報告書 第144集

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほる、いかす、つなぐ。～はくつちょうさとかつようのさいぜんせん～
書 名	掘る、活かす、つなぐ。～発掘調査と活用の最前線～
副書名	
シリーズ名	都城市埋蔵文化財保存活用整備事業報告書
シリーズ番号	
編著者名	原 栄子・近沢 恒典・加覧 淳一・栞畑 光博
編集機関	都城市教育委員会
所在地	〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
発行年月日	2021 年 3 月

都城市埋蔵文化財保存活用整備事業報告書
「掘る、活かす、つなぐ。～発掘調査と活用の最前線～」
2021 年 3 月

発行 宮崎県都城市教育委員会 文化財課
〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549

印刷 株式会社 東謄写堂
〒 885-0075 宮崎県都城市八幡町 1-5
TEL 0986-22-3847 FAX 0986-22-2943

私たちが生活する地面の
下には、たくさんの遺跡が
眠っているたむ～



たむたむプロフィール

生まれ 宮崎県都城市丸谷町 下園遺跡
年齢 約8,000歳
特徴 縄文時代最古級の壺形土器（手向山式土器）の妖精。
背には弓を、壺には矢を持ち、山で迷った時のためにポシェットにドングリを持ち歩く！
尖った（山形）物が大好き。
都城の遺跡の魅力を伝え歩く。

都城市マイブンキャラクター
「たむたむ」

大切な都城の宝を
未来へつないでいこう！

☆☆☆プロフィール☆☆☆

生まれ 今町
年齢 約8,000歳
特徴

バケツ形の土器全体に縄目文様がついているのが特徴。ほかの土器と形は似ているけれど、自分だけ模様が違うのでちょっとさみしい。土器の中身はごった煮。おなかをすかした旅人にごちそうする優しい男の子。ドングリ大好き。



都城市マイブンキャラクター
「いそいちくん」